

過去に受けた学校性教育の内容と 継続のニード (第3報)

— 大学生対象のアンケート調査から —

The contents of the school sex education that was popular in
the past and need to the continuation (The third report)

— Based on questionnaire to college students —

仁木 雪子・小沢久美子

要約 大学生 207 名を対象に、これまでにうけた性教育の内容とその効果、高校卒業後に性に関する教育や指導の必要性とその理由、性交経験と避妊状況などについて調査した。大学生の 95% がこれまでに性教育を受けており、約 66% の学生が「役に立った」と答えていた。また、41% の学生が高校卒業後も性に関する何らかの教育や指導を求めている、その理由の 42.8% は、「信頼できる正確な知識を身に付けたい」であった。59% の学生は、「高校までの知識で十分だから」「個人で学び実践していく年代だから」などの理由で、高校卒業後の性の指導は「必要ない」と答えた。性交経験や避妊の実態からは、性に関する指導の必要性はあり、大学生にはカリキュラムの中で展開する性の教育や、性に関する正しい情報の発信方法や相談方法を工夫していく必要性が示唆された。

I. は じ め に

2005 年の第 6 回青少年の性行動調査報告¹⁾によると性交経験率は、高校男子で 26.6%、女子で 30.0% であり、大学生で男子 61.3%、女子 61.1% と、大学生になると性交経験率は約 2 倍に上昇することがわかっている。大学生は青年期に相当し、アイデンティティの確立の時期である。これまでの保護的環境から

離脱し自己責任のもとで性行動が容認される時期でもある。

2009 年に筆者が実施した高校生を対象にした調査研究で、これまでに性教育を受けた経験は、94.3% とほとんどの生徒が受けていることがわかり、「役に立っている」と感じているものは 65.1% であった²⁾。また、2010

年に短大生女子を対象とした調査研究では、99.5%の学生が性教育を受けており、そのうち73%の学生は「役に立っている」と感じていた³⁾。そこで今回は、大学生を対象としてこれまでに受けた性教育の内容や効果、性

行動の実態と性に関する指導や教育の希望などを調査することにした。性行動が進み自己責任が求められる若者には、どのような性に関する指導・支援が必要なのかを検討したので報告する。

II. 研 究 目 的

大学生がこれまで受けた性教育内容と性意識・性行動を調査し、大学生に必要な性に

関する指導・支援の在り方を検討する。

III. 研 究 方 法

1. 研究デザイン：自記式質問紙調査による量的記述研究である。調査対象：調査対象はA・B大学生207名

2. 調査期間：2011年23年10月

3. 調査方法：大学の講義時間を利用して講義担当者の説明後、調査用紙を配布して、記入後に回収した。

4. 分析方法：データの集計・解析には統計ソフトPASWSatistics18を用いて集計し χ^2 検定は有意水準5%未満とした。

5. 倫理的配慮：調査の実施に際し八戸大学・短期大学紀要研究倫理委員会の審査を受けた。アンケートは無記名で、各自が封筒に入れ封をしてから回収をした。説明文を読んだ段階で協力出来ない場合は白紙のまま提出してもよいこと、回答したくない項目には回答しなくてもよいこと、質問紙はコンピューターで集計・処理を行い、研究論文発表後にはシュレッターで廃棄処分をすることを文書で説明した。

IV. 結 果

アンケート用紙は215部配布し、207部回収し回収率は96.3%であった。

1. 年齢

年齢は18～19歳が139名(67.1%)、20～21歳が60名(29%)、22歳以上が8名(3.9%)であった。

2. 性別

性別は男子が136名(65.7%)、女子が68名(32.9%)、NA3名であった。

3. 性教育を受けた経験

これまでに性教育を受けたことが「ある」

人は194名（95%）、「ない」人は11名（5%）、NA 2名であった。

4. これまでの性教育は役に立っているか？

「非常に役に立っている」は57名（24%）、「役に立っている」は102名（42%）、「役に立っていない」は24名（10%）、「どちらともいえない」は57名（24%）、NA 9名であった。

5. 今までに性教育で教わった事柄（複数回答）

多い順に「エイズ」175名（84.5%）、「性器のつくりと働き」162名（78.3%）、「生命の誕生（受精・妊娠・出産など）」157名（75.8%）、「性感染症」156名（75.4%）、「避妊」154名（74.4%）、初経（月経）152名（73.4%）、「二次性徴」147名（71%）、「精通（射精）」140名（67.6%）などであった（図1）。

6. 性教育の位置づけ

高校での性教育が「保健体育の授業」としておこなわれた人が171名（82.6%）、「外部の講師による講座」が72名（34.8%）、「課外授業」が7名（3.4%）、「地域でおこなわれた性教育事業」が2名であった。

7. 現在、性に関して知りたいこと（複数回答）

多い順に、「特にない」が81名（39.1%）、「愛とはなにか」が53名（25.6%）、「エイズ」が27名（13%）、「異性との交際の仕方」が25名（12.1%）、「男性や女性の心理や行動の違い」が22名（10.6%）、「性は人生にどういう意味を持つか」が21名（10.1%）、「性感染症」が20名（9.7%）、「避妊法」「思春期の心理」が共に16名（7.7%）であった（図2）。

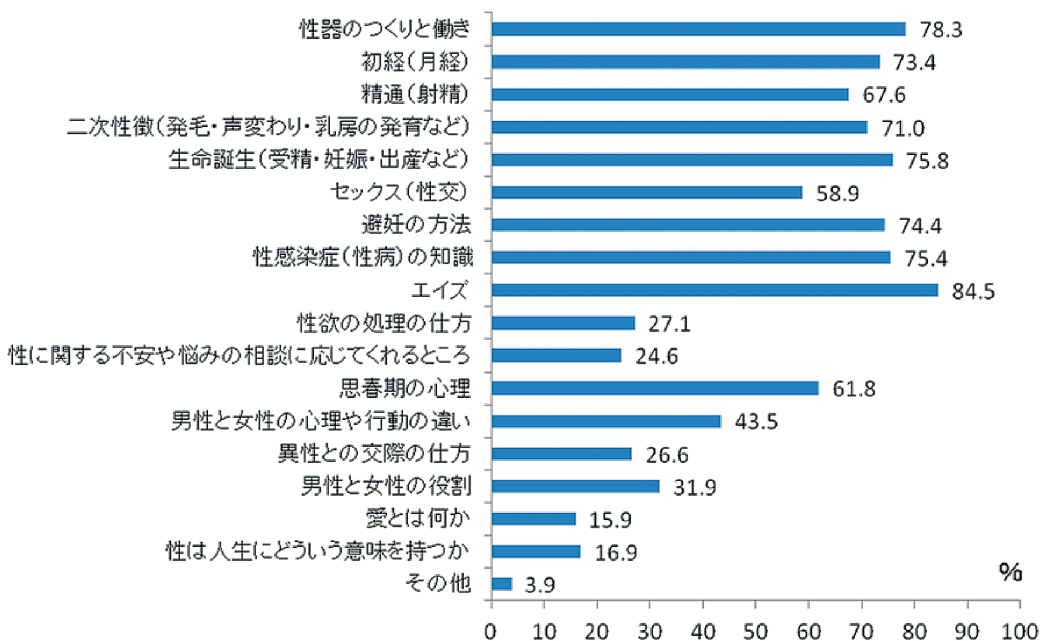


図1. これまでに受けた性教育の内容（複数回答）

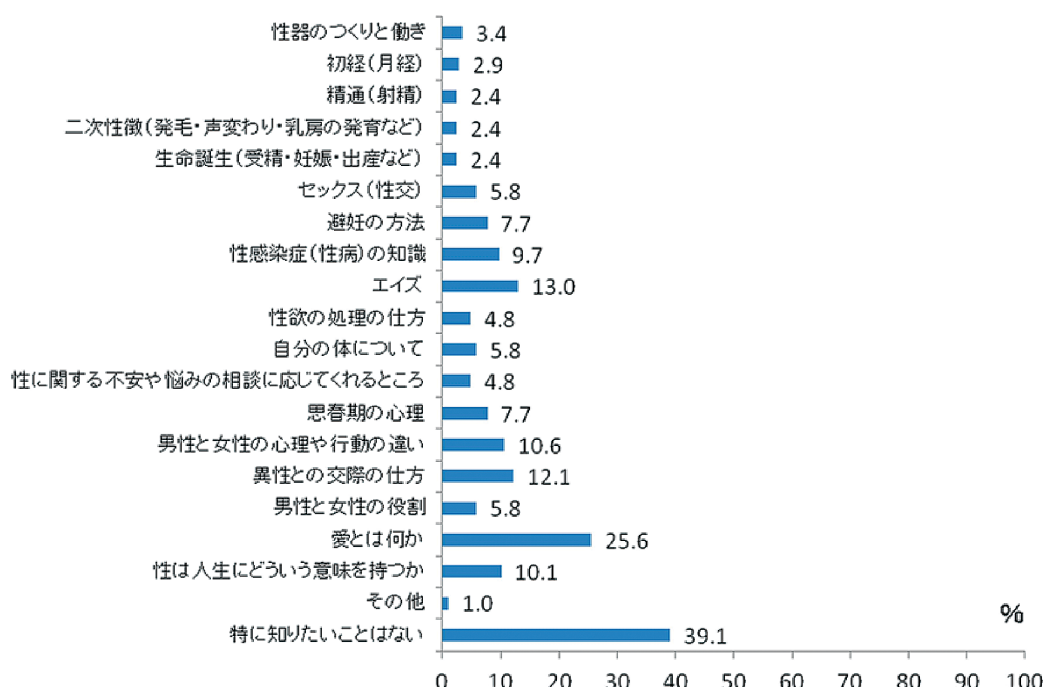


図2. 現在、性について知りたいこと(複数回答)

8. 性に関する知識や情報を得る方法(複数回答)

多い順に、「インターネット・携帯電話」が118名(57%)、「友達」が97名(46.9%)、「学校」が74名(35.7%)、「雑誌」が56名(27.1%)、「テレビ・ビデオ」が48名(23.2%)、「先輩」が39名(18.8%)などであった。

9. 高校卒業後も性教育はあったほうがよい

「はい」が84名(41%)、「いいえ」が123名(59%)であった。

10. 9で「はい」と答えた人の理由、方法、担当者(複数回答)

高校卒業後も性教育が必要と答えた人の理由は、「信頼できる正確な知識を身に付けた

いから」が36名(42.8%)、「高校生までの性教育では不十分だから」が26名(30.9%)、「高校を卒業してからの方が性の悩みが増えるから」が17名(29.2%)、「学校以外では性に関する教育や指導は受けにくいから」が15名(17.8%)、「学校以外では性に関する教育や指導が整っていないから」が11名(13.1%)であった。

希望する方法は、「講義の一環として」が46名(54.7%)、「講演の形式で」が31名(36.9%)、「相談室の設置」が20名(23.8%)、「メール相談」が16名(19%)、「冊子の配布」が13名(15.4%)、「電話相談」が8名(9.5%)であった(図3)。

希望する担当者は、「信頼できる人であれば学内外を問わない」が45名(53.5%)、「外部の専門家」が34名(40.4%)、「短大の教員」

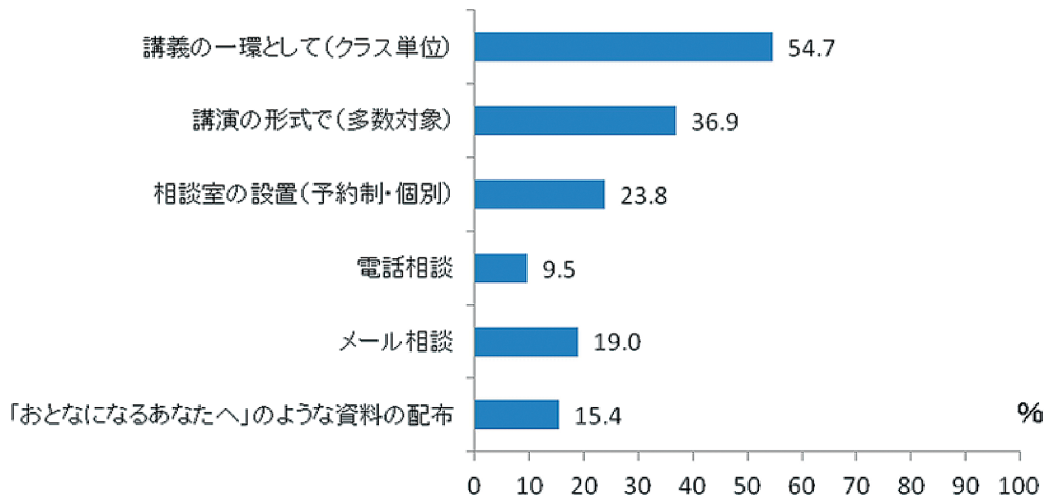


図3. 希望する教育や指導の方法

が17名(20.2%)であった。

い」が93名(45%)であった。

11. 9で「必要ない」と答えた人の理由

「高校までの知識で十分だから」が41名(35%)、「個人学び実践していく年代だから」が39名(33%)、「大学生にもなれば必要性に差が出るから」が33名(28%)であった。

13. 性交の動機

多い順に、「好きだったから」が62名(71%)、「経験してみたいと思った」が6名、「遊び心や好奇心から」が5名、「なんとなく」「相手をつなぎ止めておきたい」「無理矢理迫られて」が共に2名であった。

12. 性交経験

性交経験が「ある」は114名(55%)、「な

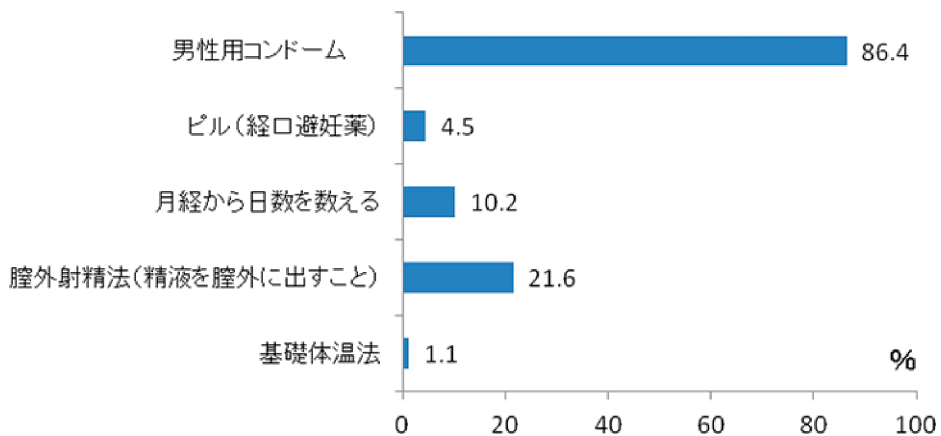


図4. 実行している避妊方法(複数回答)

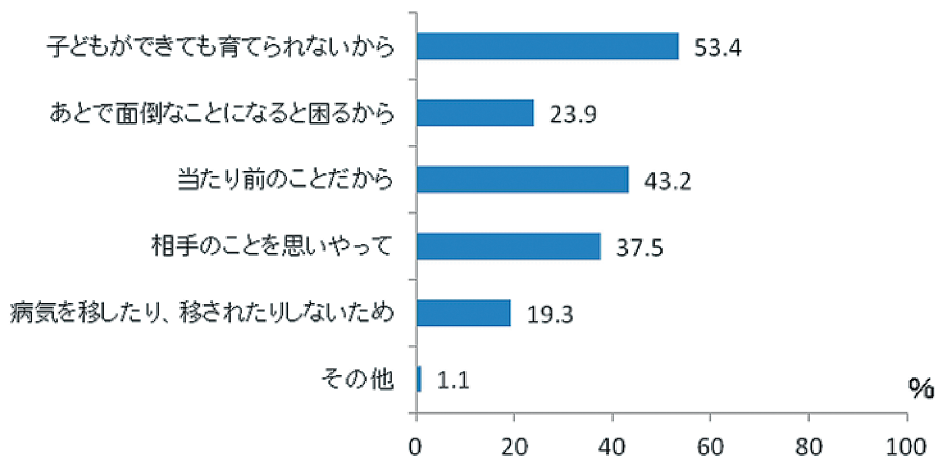


図5. 避妊する理由 (複数回答)

14. 避妊の有無と方法 (複数回答)

「いつも避妊している」は47名(55%)、「避妊するときとしないときがある」が29名(34%)、「いつも避妊していない」が6名(7%)、「覚えていない」が4名(4%)であった。避妊方法は、「男性コンドーム」が76名(86.4%)、「膣外射精」が19名(21.6%)、「月経から日数を数える」が9名(10.2%)、「ピル(経口避妊薬)」が4名(3.5%)、「基礎体温法」が1名であった(図4)。

15. 避妊する理由、しない理由 (複数回答)

避妊する理由は、多い順に「子どもが出来ても育てられないから」が47名(53.4%)、「当たり前のことだから」が38名(43.2%)、「相手のことを思いやって」が33名(37.5%)、「あとで面倒なことになると困るから」が21名(23.9%)などであった(図5)。

避妊しない理由は、多い順に「準備していないことが多いから」が13名(37.1%)、

「たぶん妊娠しないと思うから」が7名

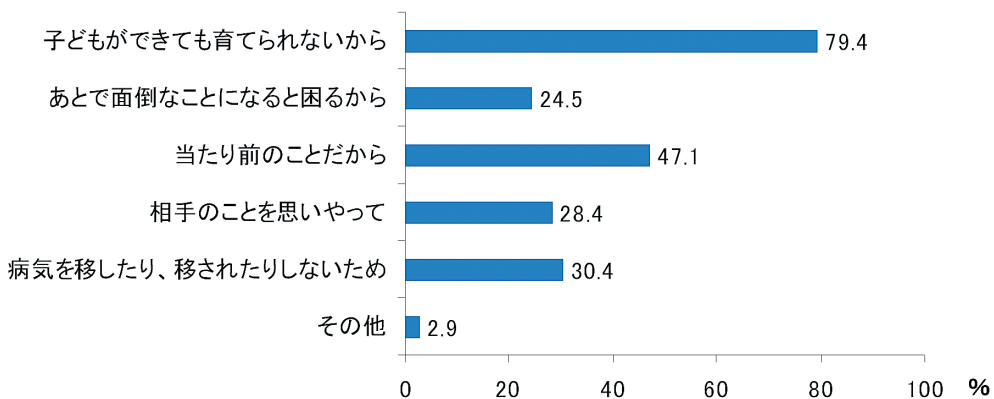


図6. 避妊しない理由 (複数回答)

(20%)、「めんどくさいから」が6名(17.1%)、「相手に断られるから」が3名(8.6%)、「避妊を言い出せないから」が2名(5.7%)などであった(図6)。

16. 性に関して相談する場所や人を知っているか

「知っている」が59名(30%)、「知らない」が138名(70%)であった。

17. 性交経験との関連

以上の結果を「性交経験の有無」に分けて

分析し、2つの項目で有意差が見られた。

1) 性に関する知識や情報を得る手段

性交経験がある人の方が、「友達から性に関する知識や情報を得ている人(53名)」が多かった($P<0.01$)。

2) 「高校卒業後は性に関する教育や指導は不要」の理由

性交経験がない人で、「高校までの知識で十分だから」を理由に挙げた人は28名で性交経験がある人より有意に多かった($P<0.05$)。

V. 考 察

1. これまでの性教育の実態と満足度

これまでに性教育を受けた者は95%ではとんどの学生が受けていることがわかる。「保健体育の授業として」や「外部講師による講座」として位置づけられていたものが多かった。内容はエイズ、性器のつくりと働き、生命の誕生、性感染症、避妊、初経(月経)、二次性徴の順で多く70%以上であった。この結果は、昨年度の調査結果³⁾や岡部ら⁴⁾の結果とほぼ同じであることから昨今の高校生までの平均的な性教育内容として考えてよい。また、受けた性教育は、「非常に役に立っている」、「役に立っている」を合わせると約66%と評価している。

2. 現在、性に関して知りたいこと、知識や情報を得る方法

現在知りたいことは、「特にない」が最も多く、次いで「愛とは何か」が多く、「エイズ」

「異性との交際の仕方」「男性や女性の心理や行動の違い」「性は人生にどういう意味を持つか」と続いた。これは、青年期を迎え、恋愛や恋愛以外にも多くの出会いによって生じる悩みや気付き、自分自身のアイデンティティの確立に向けての課題ともいえる。思春期を終え、……のこの時に性に関する知見を増やし、リスクを避ける為の性教育から人間理解の性教育へと発展させていく必要があると考える。

今回の調査で特徴的であったのが性に関する知識や情報を得る手段で、前年度の調査では「友達」が最も多く60.1%であり、「インターネット・携帯電話」は、「友達」「学校」「雑誌」の次であったが、今回は最も多く57%であった。インターネットや携帯電話が学生にとってかなり有用な存在になってきていることがわかる。情報入手がしやすくなればなるほど「正しい情報は何か」を見わけける能力には、

やはり基礎的知識や相談できる手段を持ち合わせていなければならないと考える。

また、7割の学生が性に関する相談場所や人を知らないことから、入手しやすい一方通行な情報収集だけでなく、安全な社会資源の活用方法なども伝えていく必要がある。

3. 性教育継続の希望とその理由

高校卒業後も性に関する指導や教育を「必要」と答えたものは41%で、「必要ない」ものが59%であり、短大生女子を対象とした結果とほぼ同じであった。必要である理由は、「信頼できる正確な知識を身につけたい」が最も多く、友達関係も含めた多くの性情報の中にあっても信頼できる情報に不足を感じていることがわかる。求める方法は、「講義の一環として」が最も多く、第2報³⁾と同じ結果であり、大学という学業の場を通じて信頼できる講師から学びたいと考えている。

「必要ない」の理由からは、性行動に個人差が出る時期であり高校までの知識を活かしながら自ら学ぶべきといった大人としての自覚が伺われる。しかし、性交経験のある学生の方がいない学生より「高校までの知識で十分だから」を理由に挙げたものが有意に少ない。つまり、性交経験によって新たな知識のニードは高まることになる。

4. 性交経験と避妊の実態

性交経験率は55%と全国調査（大学生対象）に比べ低い。また、性交の動機や避妊の実態もこれまでの報告とほぼ同じであった。しかし、「避妊するときとしない時がある」「いつも避妊はしていない」を合わせると41%、避妊方法の86.4%は男性用コンドームで、膣

外射精法をしている学生が21.6%もいるということは、今後妊娠といった結果に至る可能性が高い学生たちであることを意味する。また、避妊しない理由として、「準備していないことが多いから」「たぶん妊娠しないと思うから」「めんどくさいから」をあげていることから、性に関する知識はもちろんであるが、自他を思いやる意味や責任ある人間関係についても学ぶ必要がある。

服部は、青年期の特徴として、「大人の体になっているにもかかわらず、まだ完全な大人ではない。突き上げてくる異性に向かう性の欲動に揺さぶられながら、性を行為化して親になることや、一人前の生活者として一家をなすことを抑えて生きねばならない。それはかなりなストレスであり、また欲求不満（フラストレーション）であろう。」と述べている⁵⁾。大学生は、性への欲求や欲求不満を抱えながら成人期への移行期を過ごす不安定な時期であることを、もっと認識し学習へとつなげる必要があると考える。

5. 大学生の性教育のあり方

大学生の性教育に関する要望は半分以下ではあるが、彼らの性交経験や避妊の実態からみると性に関する指導の必要性はある。大学では、性に関する専門の科目は少なく、また、性に関する講演もめったにおこなわれない。看護系の大学であれば、母性看護学や精神看護学でセクシュアリティあるいは人間の性を取り扱うことがある。一般の大学においてはいわゆる教養科目の中にセクシュアリティに関する科目を選択科目としてでも位置づけることを提案したい。また、教育学部や将来教師を目指すコースにおいては性教育の担い手

になる可能性があるため、必修科目とすべきと考える。

講義として位置づける他に、個人差やプライバシーの保護に配慮しながらの具体的な相談・指導を受ける窓口の設置が必要である。パソコンや携帯電話が日常化している学生にはメール相談が有効であろう。大学入学当初に行われるオリエンテーションでの学生指導の場面を通じて、性に関するリーフレット（避妊・性感染症予防・DV・性被害などの情報を掲載した）を配布することもできる。

高校までの学校性教育の目標は、「①男または女としての自己認識を確かにさせるとともに、異性に対する認識を深めさせる。②人間尊重の精神に基づいて男女の人間関係を築

くことができるようにする。③家庭や社会の一員として生きていくうえで必要な人間の性に関する基礎的・基本的な事項を習得させ、現在および将来の生活において、性にかかわる諸問題に対して適切な意思決定ができるようにする。」である⁶⁾。大学においては、成人期に向かう過渡期として社会性を身に付け大人になるためにさらに成長する必要がある。大学生は学問を学ぶという立場を活かして、性を広く深く自然体として受け止めながら学んでいける。これまでのリスク予防中心の性教育から人間理解の教育として、さらにいずれは性教育に携わることになる立場を意識しながら、大人の教養となるよう主体的に学ぶことを期待できると考える。

VI. お わ り に

今回の調査では、大学生がこれまでに受けた性教育についてと卒業後の性に関する教育や指導への要望、性行動について知ることができた。高校卒業後は発達課題がレベルアップし、人間関係にも幅や深さが増していく。そういった中で人間に欠かすことのできない「性」について学ぶことは、自ずと判断や行動に違いが生じてくる。たとえ、学生自身が必要性を認識していなくても、学生の性意識や性行動の実態から性に関する教育や指導の

ニーズはあり、それに答えられるようなカリキュラムや学生支援対策を構築していきたいと考える。

謝辞

この研究にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。また、本研究には八戸短期大学後援会特別研究助成金をいただき、重ねて感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 財団法人日本製教育協会編：「若者の性」白書 第6回青少年の性意識・性行動調査報告，小学館，151, 2007
- 2) 仁木雪子，山野内靖子他：過去に受けた学校性教育の内容と継続へのニーズ—高校生対象のアンケート調査から—，産業文化研究，第19号，八戸大学八戸短期大学総合研究所，159-164, 2010
- 3) 仁木雪子，小沢久美子：過去に受けた学校性教育の内容と継続へのニーズ（第2報）—短大生女子対象のアンケート調査から—，八戸短期大学研究紀要，第33巻，35-43, 2010
- 4) 岡部恵子，佐鹿孝子，他：大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題（第1報），母性衛星，Vol. 50, No. 2, 343-351, 2009
- 5) 服部祥子：生涯人間発達論，医学書院，83, 2004
- 6) 田能村祐麒：性教育の考え方進め方，学校図書，56-57, 1987